

『ユリシーズ』の中の二つの卵

浅井 学

序

20世紀最大の小説家と呼ばれる James Joyce の代表作 *Ulysses* (1922) は、全部で 18 章、あるいは 18 の「挿話」で構成されている。そして、それぞれの章が独自のテーマを持ち、ジョイスがそのテーマを書くのに相応しいと考えた「文体」で書かれている。その最終章、すなわち、第 18 挿話「ペネロペイア」は、最初から最後まで全てヒロインである Molly Bloom のベッドの中での内的独白で書かれており、最後は夫となるブルームからのプロポーズを受入れた時の思い出で終わる。プロポーズの場所は、作品の舞台となるアイルランドの首都ダブリンの郊外にあるハウス岬の丘の上。あたりに人気はなく、モリーは大地に横たわり、ブルームは彼女に覆いかぶさるような姿勢である。

[...] and then I asked him with my eyes to ask again yes and then he asked me would I yes to say yes my mountain flower and first I put my arms around him yes and drew him down to me so he could feel my breasts all perfume yes and his heart was going like mad and yes I said yes I will Yes. (18.1605-09)¹⁾

若き日のモリーの恍惚と現在のブルームへの愛情が同時に伝わってくる大変感動的な物語の終わり方である。

これに対して第 18 挿話の出だしは極めて散文的である。翌朝の朝食の話なのだ。

Yes because he never did a thing like that before as ask to get his breakfast in bed with a couple of eggs since the City Arms hotel [...]. (18.1-2)

「ユリシーズ」とはオデュッセウスのラテン語名で、その作品名が暗示するように、『ユリシーズ』の主人公ブルームは現代のオデュッセウスに見立てられている。しかし、美しい妻が貞節を守り通した古の英雄物語とは対照的に、現代のオデュッセウスは寝取られ亭主である。一日の放浪の旅を終えたブルームは、第 17 挿話「イタケー」の最後の方で、妻の眠る共同のベッドの中に体を滑り込ませ、そこに間男の痕跡を確認し、葛藤しながらも自分の気持ちを押しえつけ、妻の浮気を受け入れて心の平静を確保する。そして、目を覚ましたモリーに一日の出来事をおおまかに報告し、眠りに落ちる。どうやら眠りに落ちる前のいずれかの時点で、引用にあるように二つの卵を添えた朝食をベッドに持ってきて欲しいとモリーに頼んだようである。

今「どうやら」と述べたのには訳がある。第 17 挿話「イタケー」でブルームがモリーとベッドで会話をする部分では、朝食の件についての会話が描写されていないのだ。読者は第 18 挿話に入って

唐突にこのことを耳にするのである。そのために読者はこの一節をとりわけ印象深く心に刻むことになる。この朝食の件に関してはこれまでもいろいろな意見が出されてきたが、いまだに検討が十分とは言い難い。本稿の目的は、この朝食に関するモリーの内的独白、とりわけその中で言及される二つの卵の意味について改めて考察することである。

1. 夫婦関係改善のきっかけ

まず確認しておきたいことは、妻に朝食の用意を頼むというこの行為が、ブルーム夫妻の夫婦関係改善のきっかけになりうるということだ²⁾。

話を進める前により詳しく状況を確認しておこう。ブルームとモリーはおよそ11年前に生まれたばかりの息子を亡くしてしまう。この件はブルームのトラウマになっているらしく、彼の意識の中で抑圧されているため、彼の「意識の流れ」(stream of consciousness)の中で詳しく出てくることはない。だが、おそらくは未熟児か、なんらかの障害を持って生まれてきたのだと推察される。

She knew from the first poor little Rudy wouldn't live. Well, God is good, sir. She knew at once. He would be eleven now if he had lived. (4.418-20)

ここでブルームが思い出している「彼女」とは、ルーディを取り上げた助産婦の Mrs Thornton (4.417) のことなのだが、彼女は一目でルーディが生き延びることができないということが分かったというのである。

ルーディがどういう状態で生まれてきたかについてはこれ以上判然としないのだが、いずれにしても、この一件が原因でブルームとモリーの夫婦関係はうまくいかなくなる。第17挿話にある言葉を使えば、この事件以後二人の間ではずっと「肉体交渉が不完全」(carnal intercourse had been incomplete) (17.2283) なのである。『ユリシーズ』の中で描かれる一日、つまり1904年6月16日、モリーが間男ボイランを家に入れ浮気をし、ブルームを寝取られ亭主にするのは、そうした状況に対する彼女の不満が原因である。

ブルームは、この日の朝来た手紙から、ボイランが家を訪ねモリーが浮気するという可能性を認識しながら、浮気の実現を阻もうとしない。これをもってブルームのマゾキスティックな性格が指摘されたこともある。実際、創作ノートの中には、“Jealousy passion: must contain joy.” (LB. True!) という書き込みがあり (Herring 482)、ブルームのマゾ的側面の傍証と考えることもできる。しかし、ブルームのそうした一面をまったく否定することはできないとしても、ブルームがモリーの浮気を容認する大きな理由は妻を性的に満足させていないという負い目であろう。

さて、こうしたことが生活の他の面にも影響しているのか、『ユリシーズ』でブルームが最初に登場する朝の場面では、彼は妻のためにかいがいしく朝食を作り、まだベッドの中にいる妻の元へ運んでいく。これが毎日のことかどうかは必ずしも明確ではないが、前述のモリーの言葉から推察すると、シティ・アームズ・ホテルで暮らしていた時以来朝食を作るのはブルームの仕事だったと考えることもできる。いずれにしても、ルーディが生まれてすぐ亡くなるのは彼らがシティ・アームズ・ホテルで暮らしている頃の話であり (Raleigh 131-33)、ジョイスはここで明らかにルーディの死

と夫婦関係の悪化と朝食の話を結びつけようとしている。このような背景があるため、ブルームがモリーに朝食の用意を頼むのは決して瑣末な出来事ではなく、夫婦の関係（あるいは力関係）を再規定するような重要な出来事と捉えられるのである。

モリーは、第18挿話の中で、浮気相手のボイランのことや他の男性のことなどをつらつら考えた後、ブルームのことを見直し、最終的にブルームにもう一度正常な夫婦関係を取り戻す機会を与えようとする。そして、その時にもう一度朝食のことを考える。

[...] Ill throw him up his eggs and tea in the moustachecup she gave him to make his mouth bigger [...]. (18.1504-06)

彼女は、ブルームがリクエストした卵と娘のミリーがブルームにプレゼントしたマスタッシュ・カップ（男性の口ひげがお茶に濡れないようにカバーがついているカップ）にいったお茶を、階下の台所から寝室に持って上がろうと考えるのだ。

このような文脈を考慮に入れれば、「ベッドで卵二つを添えた朝食が食べたい」というブルームの意外なリクエストが、モリーにもう一度ブルームのことを考え直させ、それがブルームの良いところを再確認させ、もう一度やりなおしの機会を与えようと思立たせた、とすることができるだろう。この点において、確かに妻に朝食の準備を頼むというブルームの行為は夫婦関係の転機をもたらすきっかけになっているのである。

さて、このことは作品全体の象徴構造によっても裏打ちされていると筆者は考えている。先に述べたように、ブルームの物語が始まる第4挿話冒頭で読者は朝食を準備するブルームの姿を目撃するのだが、そもそもなぜブルームの物語は朝食の準備から始まるのだろうか。考えてみれば、これはちょっと不思議な物語の始め方である。ブルームの物語自体は第17挿話で布団に入って眠るところで終わるわけだから、布団で目を覚ますところから物語を始めて、分かりやすい円環構造を作って物語を終えるという選択肢もあったはずなのである。

この疑問への答えは、いつものことながら、ジョイスの言語連想を重んじる小説作法にある。ブルームは朝食の準備でトーストを焼き、自分用に豚の腎臓を炒めるのだが、要するにここで彼は *cooking* をしている。そして、この *cook* という動詞には、「熱を加えて料理する」という意味の他に、別語源の古い用法で「カッコーと鳴く」(To utter the note of the cuckoo) (*OED*) という意味がある。そして、カッコー (*cuckoo*) は寝取られ亭主 (*cuckold*)に通じる。*cuckold* という単語は、もともとカッコー (*cuckoo*) を意味する古フランス語の *cucu* に語源を遡るのだ。つまり、この作品の中でブルームの *cooking* は、彼が寝取られ亭主になることを象徴する行為と設定されているのである。したがって、ブルームが翌朝の朝食の準備を止めることは、寝取られ亭主でありつづけるのを止めることを象徴的に表すとも読めるのだ。

2. ブルームはいつ朝食のリクエストをするのか？

このように、二つの卵を添えた朝食をベッドで食べたいというリクエスト、言い換えれば、モリーに朝食の準備をして欲しいというブルームのリクエストは、作品の象徴構造から考えても夫婦関係

が改善する可能性を示唆する重要な一節なのである。このことを確認した上で、ブルームのリクエストについて以下の疑問点を考えてみたい。なぜブルームはわざわざ二つの卵 (a couple of eggs) を欲しいと言うのか。そして、そのことを一体いつ言ったのだろうか。まず、後者の問題から考えてみよう。

もしブルームがこのリクエストをしたとするなら、それはブルームが眠りに落ちる前にモリーとした会話のどこかでと考えるのが自然な読み方だろう。第17挿話の最後の方でブルームが夫婦で共有しているベッドにもぐりこんだ後、すでに眠っていたモリーが目を覚まし、ブルームに今日一日の出来事をあれこれと尋ねる。ブルームはこれに対して、あることはありのままに語り、あることは隠し、またあることは脚色して答える。ところが、前にも言及したように、この場面ではブルームが朝食に卵を添えて持ってきて欲しいというリクエストは出てこない。

もちろん、ジョイスがこの情報をわざと物語の流れの中の、普通なら出てくるべき場所では出さなかったという可能性もある。実際に『ユリシーズ』の中にはこうした例がないわけではない。その中でも最も研究者の中で知られているのは、モリーがボイランと会う約束をした時間に関するものであろう。二人の会う約束の時間は4時で、このことをブルームはその時間が来るまでずっと気にかけているのだが、この時間をいつブルームが知ったのかテキストには書かれていないのである。

状況証拠からすると、4時ということは、この日の朝ボイランからモリーに届いた手紙に書いてあるはずである。第4挿話で、朝食の準備中に自分用の豚の腎臓を近所の店に買いに出かけて家に戻ったブルームは、戸口に二通の手紙と一通のカードが届いているのを見つける。そして、その中の一通の手紙がボイランからのものである。ブルームはそれを取り上げ、まだベッドの中にいるモリーの許へ届ける。ブルームはお茶を入れるために一旦台所に降り、モリーの朝食を持って再び寝室に戻って行く。そして封を切った封筒の片端が枕の下から飛び出しているのを見つける。中身が気になるブルームは、ボイランからの手紙であることをすでに知りながら、知らないふりをして誰からの手紙だったかを尋ねる。

A strip of torn envelope peeped from under the dimpled pillow. In the act of going he stayed to straighten the bedspread.

— Who was the letter from? he asked.

Bold hand. Marion.

— O, Boylan, she said. He's bringing the programme.

— What are you singing?

— *Là ci darem* with J. C. Doyle, she said, and *Love's Old Sweet Song*.

Her full lips, drinking, smiled. (4.308-15)

少し注釈しておくなら、アマチュア歌手でもあるモリーは興行師のボイランと一週間後の6月23日にベルファーストへ公演旅行に出かける予定になっており (5.151-52)、ボイランが持ってくるプログラムはその公演のものである。さて、もしモリーがボイランが家に来る時間を話したとしたら、この引用の中でそのことを言っても全然おかしくないところである。特に「プログラムを持ってくるの」(He's bringing the programme)の後に「4時に」(at four)と極めて自然に入れることができる (McBride 25)。それなのに書かれていない。これは一体どういうことなのか。

この問題に関してはこれまでのところ大きく分けて二つの考え方がある。一つは、第4挿話と第5挿話の間の小説の中では描かれない時間帯で、ブルームが再びモリーと会話をしてボイラン訪問の時間を聞いたという考え方。もう一つは、かなり高い確率で不倫に発展するであろうボイランの訪問のことをブルームはできるだけ考えたくない、つまりそれに関する思考を抑圧したいので、それを反映してテキストがモリーによって発せられたはずの“at four”という言葉を抑圧しているという考え方である。ジョイスの小説は、処女作の *Dubliners* (1914) から、テキストの文体が描かれる人物の性質や心の状態を反映するように書かれているから、ことジョイスに限って言えば後者のような考え方も決して突拍子もないものではない。

どちらの考え方が正しいにしろ、このような例があるのだから、なんらかの理由で、卵付きの朝食をベッドで食べたいというブルームのリクエストが、テキストから隠されたとしても不思議ではない。しかし、朝食のくだりは、ブルームの意識から抑圧されなくてはいけないような内容ではないし、第17挿話と第18挿話の間に第4挿話と第5挿話の間のような時間的空白があるように書かれているわけでもない（第17挿話の最後でブルームは明らかに眠りに落ちている）。したがって、「4時」の件とまったく同じように考えるわけにもいかないだろう。

実は、鶏の卵ではないが、他の卵ならば第17挿話の最後の方で出てきている。第17挿話は最初から最後までこの挿話の文体的特徴である教義問答形式で書かれているのだが、夫婦の会話が描写された後、映画のカメラが上空に引いていくように視点が遠ざかり、いわば宇宙的視点からブルーム夫妻の宇宙的運動と寝ている姿が描かれる。そして、すこし謎めいた最後のくだりにつながっていく。ここは第17挿話の終わりでもあり、『ユリシーズ』におけるブルーム・パートのエンディングでもある。

Womb? Weary?

He rests. He has travelled.

With?

Sinbad the Sailor and Tinbad the Tailor and Jinbad the Jailer and Whinbad the Whaler and Ninbad the Nailer and Finbad the Failer and Binbad the Bailer and Pinbad the Pailer and Minbad the Mailer and Hinbad the Hailer and Rinbad the Railer and Dinbad the Kailer and Vinbad the Quailer and Linbad the Yailer and Xinbad the Phthailer.

When?

Going to dark bed there was a square round Sinbad the Sailor roc's auk's egg in the night of the bed of all the auks of the rocs of Darkinbad the Brightdayler.

Where?

(17.2319-32)

第17挿話のこれより前の部分は基本的に事実を問答体で「客観的に」書くというスタイルなのだが、この最後の部分は象徴的、あるいは幻想的とも言っているような言い回しになっている。ここはタイミング的にブルームが眠りに落ちる直前からその瞬間にあたる部分なので、意識が曖昧模糊として夢うつつの状態を反映した書き方、文体になっていると考えてよいだろう。もはや問答体の形もくずれてきちんとした問答になっていないところもある。

注目したいのは、ここに出てきている卵、“a square round Sinbad the Sailor roc’s auk’s egg”である。これは二つの点でイメージしにくい一節になっている。まず「四角くて丸い」という矛盾した形容詞、そして、もう一つは「ロクの、オークの」という二つの所有格である。ここでいう roc はシンドバッドの物語にも出てくるアラビアの伝説の大怪鳥のことであり、a roc’s egg というと「信じられないような途方もないもの」という意味の熟語にもなる。一方、auk はウミスズメ科の鳥の総称で、大小色々な種類がいるが普通の鳥の範疇に収まる。構文的に曖昧なところはあるが、どちらの所有格も egg にかけて読むなら「途方もなく大きくて、小さい」卵という、こちらも矛盾したイメージになるのである。

これが象徴的に何を意味しているかは色々考えることができるが、とりあえずここでは踏み込まない。考えてみたいのはこの一節が、モリーのいうブルームのリクエストに関係しているのはいかという可能性である。

この点については Fritz Senn が興味深い指摘をしている。

Molly’s recall of Bloom’s words may be her interpretation of what the cryptic text renders as “dark bed . . . roc’s auk’s egg” (*U* 737), in the last, least articulated answer of Ithaca. This mixture of domesticity and mythology may consist of somnolent mumblings, it may be a distortion due to the relaxation of narrative control toward the end of some final chapters, or it might express the dissolution of some consciousness in the novel. (Senn 105)

彼の言いたいことを、筆者の補足を交えて分かりやすくパラフレーズするとおおよそ以下のようなことになる。眠りに落ちる前のブルームは、Sinbad the Sailor roc’s auk’s egg のようなことを口走ったのではないだろうか（シンドバッドの冒険に出てくるロクの卵のことを思い浮かべていたということだ）。それに『ユリシーズ』の最後の数章に特徴的な文体的なフィルターがかかって、第17挿話のテキストの上では “Going to dark bed there was a square round Sinbad the Sailor roc’s auk’s egg in the night of the bed of all the auks of the rocs of Darkinbad the Brightdayler.” という一節になったのではないだろうか。そして、もとのブルームの台詞を聞いたモリーが、それをベッドで卵を食べたいというリクエストと勘違いして聞いたのではないだろうか。

確かに、ぶつぶつぶやかれた roc’s auk’s egg を2個の卵と勘違いすることはありそうである。また、Senn はそこまで言っていないが、“in bed with a couple of eggs” の “in bed” も、Sinbad の “inbad” の部分のつぶやきを “in bed” と聞いてしまったと考えれば腑に落ちる。ブルーム夫妻のベッ

ドの中でのやり取りはどんどん簡潔なものになっていった (increasingly more laconic narration) (17.2273) と書かれているから、そのような会話の流れの中なら、半ば寝言のように囁かれた曖昧な言葉をモリーが誤って解釈するのも無理はないだろう。

しかし一方で、このくだりには逆の考え方もある。C. H. Peake は、むしろブルームのリクエストが、第 17 挿話の文体的変容を受けて roc's auk's egg になったという解釈をしている (Peake 297)。この場合はブルームは、Sinbad the Sailor roc's auk's egg のような台詞を寝言みたいにつぶやくのではなく、はっきりと次の朝の朝食をどうしたいかモリーに言ったことになる。

Senn の解釈と Peake の解釈のどちらが正しいかを定めるための決定的証拠はない。このようなテキストの曖昧さ、解釈の決定不可能性は『ユリシーズ』を読む読者がよく体験することであり、最終的解釈を出すのが難しいこともめずらしいことではない。しかし、どちらの読み方がより面白いのか、どちらがジョイスの考えそうなことか、という観点から議論を進めることはできる。そのような考えに従って先を続けるなら、筆者としては、Senn の仮説の方が面白いのではないかと考えている。そして、Sinbad から “in bed” を引き出してくるような発想は、いかにも駄洒落好きなジョイスらしい。

もし Senn の仮説が正しいとすると、先に述べたブルーム夫妻の夫婦関係の改善の可能性は、モリーの勘違いから生まれるということになる。勘違いが悲劇の原因になる話は色々あるが、将来の希望につながる例はあまりないのではないだろうか。そしていっそう大事なのは、勘違いの背景である。モリーがそのような勘違いをしたら、それはモリーの気持ちのどこかに、そのような勘違いをする素地があったからである。つまりブルームの方から何らかの現状改善の働きかけをして欲しいと考えていたからこそ、そのような勘違いが生まれたというように考えられるのだ。そして、それはとりもなおさず、浮気に走ったモリーが、そうした裏切り行為にも関わらずブルームを見捨ててはいない証拠、いまだにブルームを愛している証拠の一つと考えることができるだろう。そして、そのことは実際に第 18 挿話の後の部分で証明されることになるのである。

3. 無限を生み出す

第 18 挿話の最初に出てくるブルームの朝食の卵に関しては、もう一つの疑問がある。それは、そもそもなぜここで卵の数が二つと指定されているのかという点だ。この疑問はとるに足りないテキストの細部に関するこだわりと受け取られるかもしれない。しかし、『ユリシーズ』をずっと通して読んできて、その中で展開されてきたジョイスの小説作法を知る者ならば決して無視することのできない細部である。ジョイスは、一見取るに足りないように見える細部にこそ重要な仕掛けを施したり、メッセージを忍ばせたりするからだ。しかも、ジョイスの発想はしばしば多層的である。一つの細部に同時にさまざまな象徴的な意味を持たせたり、テキストの中で複数の機能を持たせたりする。筆者の考えでは、「二つの卵」もそのようなものの一つである。

まず卵 (egg) はもっとも簡単な連想として、その形状から数字のゼロを連想させる。その連想から、『ユリシーズ』の中でも描写があり (5.558-61)、イギリスの文化的影響が強い国々で盛んなスポーツ、クリケットで零点を意味する duck's egg という表現が生まれた。ジョイスは小さい頃からクリケットに強い関心があったから (Ellmann, *James Joyce* 29)、この表現を知っていたのはまず間違いな

いし、実際第5挿話で duck's egg の省略形である duck という言葉が使われている (“Duck for six wickets.” (5.560))。Andrew Norris は、18挿話冒頭の二つの卵が、もし目玉焼き (sunny-side up) だとするなら、これは二つのゼロを表すと指摘している (Norris 163)。この指摘は非常に面白いが、そこまで考えなくても二個の卵は二個のゼロを表すと言うことができる。

これがどのような意味を持つかを考えるためには、ジョイスの『ユリシーズ』創作ノートの次のような書き込みが参考になるだろう。

0 produces ∞ (Herring 456)

「ゼロが無限を生み出す」という命題は、まるで禅問答のように難解だが、単純に二つの横になったゼロが結びついて、無限を表す記号になると考えれば、一応の説明はつく。

そして、無限記号は、ジョイスが『ユリシーズ』を書く時に用意した計画表の中では、第18挿話の時間を表す記号となっている (Ellmann, *Liffey* 巻末表)。つまり、第18挿話は、一日の或る時刻を計画表によって割り当てられているブルームの各挿話と違い、無限の、いわば、神話的時間が紡ぐ物語として書かれているのである。そして、その無限の物語は、ブルームが言ったとモリーが考える卵の話、つまり象徴的なゼロを発端として始まるのだ。また、このことは、よりリアリスティックなレベルで考えてみる必要もある。ブルームが「二つの卵を添えた朝ご飯をベッドに持ってきて欲しい」という最近の彼には考えられない要求をしなければ (あるいは、そう要求したとモリーが考えなければ)、モリーもあのように延々とした、まさに無限に続くかのような物思いにふけることもなかっただろう。つまり、第18挿話は生まれなかっただろう。

以上のように考えれば、確かに二個の卵=ゼロは、二種類の無限を、つまり、無限記号と第18挿話という無限の神話的時間の物語を生み出しているのである。

4. 全てを受け入れる

ずいぶんと象徴的な話になってしまったが、オデュッセウス／ユリシーズに負けず劣らず狡知に長けたジョイスである。話はこんなところでは終わらない。『ユリシーズ』において、意識の流れでリアリズムの極地を、多種多様なテキストの仕掛けでシンボリズムの極地を追求してきたジョイスが、最後の章に仕組んだからくりは、最後を飾るにふさわしい作品全体のシンボルでもなくてはならないはずなのである。そうだとすれば、我々はまず、『ユリシーズ』が全体として何を描いた小説なのか、何をめぐる作品なのか、何をテーマにしているのか、その問題を今一度確認しておかなくてはならない。『ユリシーズ』のテーマは何か。それは、おそらく、愛、しかも、その対象を良いところも悪いところも含めて全面的に受容するという形で表される愛である。

今一度、作品を振り返ってみよう。『ユリシーズ』は寝取られ亭主と浮気妻の物語である。ブルームと妻モリーはおよそ11年前に息子を生後すぐに亡くして以来、夫婦関係がぎくしゃくするようになる。その結果、モリーは約11年の長きにわたり欲求不満を募らせていく。そのために最近親密になった興行師の男ボイルンと不倫を犯してしまう。いろいろと説はあるが、筆者の考えではモリーにとって一線を越える浮気はこれが初めてである。ブルームは夜妻と共有しているベッドに入って

そこに間男がいた痕跡を認める。

この日にボイランが家にやって来ることを、ブルームはモリーとのやり取りの中で知っている。妻の浮気を防ごうと思えばいくらでも打つ手はあったはずなのに、彼はあえてそれをしない。前にも述べたように、長い間妻を満足させることのできなかった引け目があったからだろう。そこにはブルームのある種の覚悟のようなものを見て取ることもできる。

だからといって、妻の浮気を事実として確認した時に、平然としていられるかと言えばそうではない。浮気の痕跡を認めた時、ブルームの心には、寝取られ亭主の苦い情念が湧き上がってくる。ブルームはそれをオデュッセウスの強弓に比することのできるような強い理性の力によって押さえつける。彼の思念の中に妻への怒りや憎しみはない。一日の大冒険の旅の結末として、ブルームは、あるがままの存在として妻を（そしてこの世界を）受入れるのだ。

一方のモリーの方も、夫が寝た後、今日の不倫のことや過去の出来事などをあれやこれや思い出し、夫の欠点や落ち度に不満をもらし腹を立てたりしながら、最後にもう一度ブルームに夫婦生活をやり直す機会を与えようとする。色々な夫の欠点を確認、再確認しながらも、モリーは最終的にブルームを受入れるのだ。そして、かつてハウス岬の丘の上でブルームのプロポーズを「受入れた」時のことを思い出しながら、おそらくは、眠りに落ちる。

単純に好きという感情でも、怒りや憎しみでもなく、それらを超越して良いところも悪いところも含めた相手の全存在を受入れること、形は多少違えど、ブルーム夫婦が最終的にたどり着くのはこうした愛の境地なのである。

さて、ここでもう一人の主要登場人物スティーブン・ディーダラスのことを考えておくことも重要かもしれない。22歳のスティーブン自身は、若いせいもあってか、ブルームやモリーのような境地にはたどり着いていない。彼が今後どのような成長を遂げるのかは、暗闇に足音だけを残してブルームの家から去って行く『ユリシーズ』における彼のラストシーン同様、闇の中である。しかし、我々がここで注目しなくてはならないのは、彼がこの日一日心の中で求め続けてきたものだろう。それは「母の愛」である。

スティーブンの母親は、信仰厚いカトリック教徒で、スティーブンが信仰の道に入ることを望んでいた。スティーブンは芸術家を目指し、自由な精神活動を妨げるものとしてカトリック教会を離れ、ダブリンからパリへと旅立つ。その後母親は病に倒れ、スティーブンはダブリンに呼び戻されるが、母親が病の床に伏しながら自分の魂のために祈って欲しいと望んでも、信仰を捨てたスティーブンは自らの信念ゆえに母親の望みを拒否する。母親の死後、スティーブンはそのことで良心の呵責にさいなまれ、母親が亡霊となって自分を責めに来る夢を見たりしている。そしてスティーブンは、第15挿話「キルケー」で、悪鬼となって彼の目の前に現われる母親の幻影に向かって次のように言う。

STEPHEN

(eagerly) Tell me the word, mother, if you know now. The word known to all men.

(15.4191-93)

ここで出てくる“The word known to all men”とは、第9挿話でのスティーブンの内的独白“Do you

know what you are talking about? Love, yes. Word known to all men.” (9.429-30) との整合性を考えれば、“love”である。つまりスティーブンは、信仰を捨て母親の望みに反して臨終の床でお祈りをしなかったような親不孝な息子でも愛して欲しい、母親にとって本来なら許容できないところも含めて自分という人間を愛して欲しい、すなわち、自分の全存在を受け入れて欲しいと言っているのだ。親の望みは聞かなかったのに、その親に対して自分の望みを一方的に述べるのは、わがままな子供の勝手な言い草とも取れる。しかし、いずれにしても大事なものは、スティーブンの苦しむ姿を通してジョイスが問題にしているのも、相手の全存在を受け入れる愛の形なのである。

筆者の考えでは、二つの卵はこうした愛のシンボルでもある。先に、egg がゼロを表すという話をしたが、ゼロのことをテニスなどでは love と呼ぶ。『ユリシーズ』の中でもテニスのことはしばしば言及されるし³⁾、イギリス系のスポーツが取り入れられていたパブリックスクールに通っていたジョイスがテニスのことを知らなかったとは考えにくい。また、第18挿話を書いていた頃ジョイスはパリに住んでいたし、それ以前からフランス語が堪能だったが、フランス語で卵は定冠詞を付けると l'oeuf となる。『ユリシーズ』の後に書く多言語による駄洒落尽くしの『フィネガンズ・ウエイク』を例に取るまでもなく、駄洒落好きのジョイスが love と l'oeuf を結び付けなかったはずはない。連想としては単純な部類である。実際民間語源説でもゼロを表すテニスの love はフランス語の l'oeuf から来ているという意見があるくらいである (*Oxford Dictionary of English*)。

そして、テニスの試合では、ゼロ対ゼロを“love all”と呼ぶ。二つの卵が二つのゼロ、二つの love を表すなら、それは“love all”をも表すのだ。そして、“love all”は、普通に英語として読めば「全てを愛す」という意味になる。かくして「二つの卵」は、「相手の全存在を受け入れる愛」という『ユリシーズ』全編のテーマを表す象徴的存在となるのである。

おわりに

以上、『ユリシーズ』第18挿話の冒頭でモリーが言及する二つの卵について考察してきた。それは、モリーのブルームへの愛の証拠であり、リアリスティックな物語と象徴的なテキストの仕掛けという二つのレベルで第18挿話を導入するからくりであり、さらには、『ユリシーズ』全体の愛のテーマの象徴でもある。ジョイスの作品によくあるように、些細なテキストのディテールに見えて、実はいくつもの機能を持たされている重要な仕掛けの一つなのだ。

そして、考えてみれば、『ユリシーズ』の中にはこの他にも卵 = ゼロが二つ眠っている。その一つは、朝家から旅立ち、さまざまな冒険を経て夜家に帰還するという巨大な円環としてのブルームの物語。そしてもう一つは、ブルームのことから物思いを始めて、さまざまなことを思い巡らし、またブルームのことに戻ってくる小さな円環としてのモリーの内的独白。巨大な roc の卵と、小さな auk の卵。ブルームとモリーの物語が描く“Love all”。ジョイスが第18挿話の冒頭で二つの卵のことを書いた時、こうした『ユリシーズ』全体の構造も彼の念頭にあったということはまず間違いないだろう。

注

1) 『ユリシーズ』からの引用は *Ulysses: A Critical and Synoptic Edition* による。引用の後に挿話番号と

行番号を記す。

- 2) こうした考えは筆者独自のものではない。例えば、Maddox 226-28などを参照。また、ここで筆者は、あくまでも夫婦関係改善のきっかけに「なりうる」というテキストが指し示す可能性を指摘するだけで、実際にブルーム夫婦の関係が、例えば次の朝に、劇的に改善されるという強い主張をするつもりはない。
- 3) 例えば、第12挿話でブルームは、テニスと「敏捷性」や「視覚の訓練」や「血液の循環」との関係について話をする (12.945-96, 12.952-53)。

引用文献

- “Cook.” *Oxford English Dictionary*. 2nd ed. Oxford: Oxford UP, 1994. CD-ROM.
- Ellmann, Richard. *James Joyce*. New York: Oxford UP, 1982. Print.
- . *Ulysses on the Liffey*. London: Faber, 1972. Print.
- Herring, Phillip F. *Joyce’s Ulysses Notesheets in the British Museum*. Charlottesville: UP of Virginia, 1972. Print.
- Joyce, James. *Ulysses: A Critical and Synoptic Edition*. Ed. Hans Walter Gabler. New York: Garland, 1986. Print.
- “Love.” *Oxford Dictionary of English*, 3rd ed. Oxford: Oxford UP, 2010. Print.
- Maddox, James H. *Joyce’s Ulysses and the Assault upon Character*. New Brunswick: Rutgers UP, 1978. Print.
- McBride, Margaret. “At Four She Said.” *James Joyce Quarterly* 17 (1979): 21-39. Print.
- Norris, Andrew. “From the Confessional Hole to the Techno-Erotic: ‘Penelope’ and *Finnegans Wake*.” *Joyce, “Penelope” and the Body*. Ed. Richard Brown. Amsterdam, Netherlands: Rodopi, 2006. Print.
- Peake, C. H. *James Joyce: The Citizen and the Artist*. Stanford: Stanford UP, 1977. Print.
- Raleigh, John Henry. *The Chronicle of Leopold and Molly Bloom: Ulysses as Narrative*. Berkeley: U of California P, 1977. Print.
- Senn, Fritz. *Joyce’s Dislocutions: Essays on Reading as Translation*. Ed. John Paul Riquelme. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1984. Print.

(京都府立大学文学部教授)